



就任ごあいさつ

和光市市民環境部

次長兼環境課長 末永典子

令和3年4月の人事異動により、市民環境部次長兼環境課長に就任しました末永です。どうぞよろしくお願ひいたします。

本市では、令和3年3月に「第3次和光市環境基本計画」を策定しました。

策定に際して実施した市民アンケートにおいて、「特に問題意識を持っている環境問題」として、「地球温暖化（気候変動）」に関して問題意識を持っている人が最も多いという結果となりました。

地球温暖化施策については、その重要性に鑑みて、これまで個別計画として位置付けていた「和光市地球温暖化対策実行計画（区域施策編）」を本計画に統合し、一体的、効率的に施策を推進するとし、本計画の4つの「望ましい環境像」の1つとして掲げています。市域だけではなく、広くSDGsを意識した目標に向けて、市・市民・事業者で協力して取り組むこととしています。

また、昨年度は「和光市自然環境マップ」を市民環境団体のご協力のもと改訂版を作成しました。市の組織改正で所管は公園み

どり課に変わりましたが、コロナ禍で身近な地元の自然に目が向けられている昨今、地元の自然環境がひとつの地域ブランドとして認知されるきっかけとなることと期待しています。

皆で和光の緑を守りましょう！

和光市環境づくり市民会議

会長 峯岸正雄

和光市環境づくり市民会議はその役割・活動の一環として、毎年市の環境施策実施状況を点検し評価と提言を行っています。昨年度は令和元年度を対象にこれを実施するとともに、第3次環境基本計画の策定に反映戴くよう努めました。

第3次環境基本計画においても二大テーマは地球温暖化対策と緑地・湧水の保全です。市は地球温暖化対策として既に独自の二酸化炭素排出量削減目標を定め着実に成果を挙げつつ、更に一段高い目標を設定しています。一方緑地・湧水の保全については、ここ数年にわたり重要な緑地や湧水が相次いで失われる危機的な状況に鑑み、手遅れにならない内に特段の対策の立案・実行を市に要望し続けて参りました。昨年“みどり”

を担当する部署が新設され、緑地・湧水問題の解決に向け一条の光が差し込みました。

市内に残る斜面林や湧水地はほぼ個人の所有で、長期にわたる保全管理には公有地化が最適です。そのためには所有者の賛同・同意と、買取のための資金対策が不可欠です。市の厳しい財政状況の下その実現には市民の意思表示が極めて大切で、当会議は市民有志の参加を心待ちしています。何時でも参加可能です。

自然環境維持への取組み

和光市環境づくり市民会議

副会長 高橋勝緒

和光市は利便性の良さから、マンション建設などにより、緑地の消滅が急速に進んでいる。白子地区のカタクリが群生し、豊かな湧水と斜面林のあった越ノ上わんぱく広場下の緑地、川越街道バイパス沿いの立派な樹木のあった斜面林、新倉ふるさと民家園の西側に広がっていた貴重な野草の見られた梅林、数年の間にみんな開発で失われてしまった。

利便性が高く、住み良いまちとして和光市が「発展」することにはそれなりの価値があるだろう。ここで、その住みよさを守るためにも、「ここだけは次世代に残す」と定める、

貴重な緑地を守る施策が、どうしても必要だ。緑地消滅の主因は、所有者の相続問題、地価の上昇、急斜面地の開発技術の向上などが考えられる。百年以上も緑地を所有・維持してきた所有者の方が、相続などの理由で土地を手放し、乱立するマンション等を生み出している。税制や、公有地化（買い取りや有料の借地、トラスト制度による土地取得など）により、長く残されてきたみどりの環境を次世代に残したい。コロナ禍の時代、市の財政難は理解できる。炭素税や自動車税など、我々が支払っている「環境のための税」を取り込み、公有地化を進めることが必須だ。一度失われた森や湧き水の地は二度と戻らない。

都市公園は子育てにとって大変役立つ。それに比べ、私有地や公有地の森は「入りにくい」、「良い遊び場ではない」と考えられがちだ。しかし、身近な森の散策や、そこでの鳥・虫・草花・大樹など「身近な自然」とのふれあい、さらにそこでの人と人とのふれあいは、子供達の感性をはぐくみ、市民に無形の安らぎや「安全」をもたらす。

「森」が失われて衰退した文明は多い。和光市が50年後にスラム街とならないための、人の暮らしの裾野を支える「自然環境」を次世代に残せるラストチャンス時代だろう。

越ノ上わんぱく広場下の緑地の変貌



2018年3月



2019年9月



和光市環境づくり市民会議の研修会

大坂ふれあいの森 2021年5月26日

ふる里和光に白子湧水群あり

NPO 法人 和光・緑と湧き水の会

代表 高橋絹世

日本橋から4里余り、白子には古の川越街道の道筋が今も残り、「白子宿通り」、2丁目交差点を渡ると「大坂通り」の急坂になります。大坂通りが大きく右へ曲る急坂の手前に緑豊かな「大坂ふれあいの森」があります。

かつてこの辺りは湧き水が道路にもあふれていましたが、今はふれあいの森の斜面林下部から数か所湧き出して小さな流れをつくり、サワガニやヘビトンボなど湧水の指標種が見られ、春にはカタクリ、イチリンソウが咲き、武蔵野台地末端部の特徴が残る都市部の貴重な斜面林です。

2丁目交差点を県道沿いに上ると、湧水タンクがあり現在も湧水が利用されています。ここ一帯の急な斜面林の中腹、地層の境目から湧き水が湧き出す様子が見られ、白子宿特別緑地保全地区、通称「富沢湧水」となっています。ここに石垣を利用し湧水が流れる「湧水道」がありゴボウなどを洗う洗い場がありました。今でもあふれ出た湧水中にはサワガニが生息しています。

県道を渡ると熊野神社の境内になり、湧水池や不動の滝として祀られています。

5月26日環境づくり市民会議会員5名が環境課末永課長ほかお二人とこの一帯の実地研修会を実施しました。長年この湧水群を保全してきた「湧き水の会」では、湧水環境調査の報告書や学芸大の卒研にも使われた大坂ふれあいの森などの知見を活かし案内しました。

この一帯は湧水に恵まれた白子湧水群と呼ばれる地質的に重要な一帯です。特に大坂ふれあいの森は、東京と埼玉の県境にあり、「自然と歴史の交差点」として残していくべき都市部の価値ある所ではないでしょうか。

再生可能エネルギー

和光市環境づくり市民会議

友國 洋

政府は2021年度の骨太方針原案でグリーン、デジタル、地方創生を重点分野とする。住宅の新築には断熱性の高い壁材やガラスの使用を義務付けるが太陽光の義務化は見送ると新聞は伝えている。

国際経済学者の竹森俊平氏が別欄で太陽光発電について解説している。いわく「・太陽光電池における中国の圧倒的価格競争力に敗退した。

・再エネの主力を太陽光から洋上風力への

シフトが必要である。適地が集まる北海道や東北では欧州企業との共同計画が進行中で注目に値する。

・発送電の徹底分離、再エネを主、火力を副とする体制再構築が必要である。」

この中で欧州との洋上発電共同計画の実現に期待したい。かねて日本は大陸棚が狭く遠浅の北海がある欧州と比し劣後すると聞いていた。

2050年実質カーボンゼロ達成に向けてCO2排出主要国として日本の責任は重い。政府はカーボンリサイクルのイノベーションを加速させ不名誉な化石賞を返上して頂きたい。

編集後記

本紙は2006年秋号を第1号として、ほぼ毎年発行しています。去年は休刊しましたが、10号から15号までバックナンバーは市ホームページに掲載しています。

環境づくり市民会議にご関心の方は事務局にご連絡ください。

会議は原則毎月1回、市役所で開催しています。

事務局 和光市市民環境部環境課

TEL 048-424-9118

和光市環境づくり市民会議

